新宗谷館跡出土の金属製品について
―再整理と若干の考察―

山本尚人・濵喜和子

はじめに

新宗谷館跡は同志社大学京田辺キャンパス内に所在する中世城館である。1980年、同志社大学校地学術調査委員会により発掘調査が行われ、土塁中より、土器・陶磁器・石製品・金属製品が出土した。出土した遺物は現在同志社大学歴史資料館に保管されている。本資料群は調査当時、諸般の事情により報告書の発行には至らず、長年未報告のままであった。しかし、南山城地域における中世城館の様相を示す本資料群の重要性を鑑みて、同志社大学歴史資料館として再整理を行うこととなり、館報第21号では土器・陶磁器・石製品についての報告がまず行われた[1)]。本稿ではその一連の続きとして金属製品の整理を行い、その成果を事実報告する。整理には山本と濵が担当した。（山本）

１．新宗谷館跡について（図１～２）

新宗谷館跡の地理的・歴史的環境については別稿[2)]で詳しく述べているため、本稿ではその成果をもとにして簡潔に述べる。

新宗谷館跡は京都府京田辺市多々羅中垣内に所在し、甘南備丘陵より南に派生した丘陵上に位置する。本遺跡が位置する谷筋は普賢寺谷と呼ばれ、北河内・大和方面へと抜ける街道が通過し、木津川沿いの南北ルートと宇治田原方面への東西ルートが交わる結節点として、南山城地域の交通の要衝として機能してきた。

南北朝期、普賢寺谷に口駒ヶ谷遺跡などの城館が築かれ始めた。室町時代には、普賢寺川に沿って草路城・南山城・都谷館・新宗谷館・観音寺東館など多くの城館が存在し、河内と山城の国境には天王畑城が存在した。応仁・文明の乱に前後して南山城地域では多くの戦いが行われ、宝徳３年（1451）に守護畠山持国に背いた「普賢寺殿原」や、東軍として戦った狛氏、木津氏、田辺氏、井出別所氏ら国人衆が活躍した（『経覚私要鈔』・『大乗院寺社雑事記』）。乱後に成立した山城国一揆の際、中心になったのは彼ら国人衆と考えられ、普賢寺の城館群の主達も参画していたことが予想される。

戦国時代、永禄10年（1567）における松永久秀による普賢寺谷の焼き討ち（『沢蔵及松永乱記』）や、永禄12年（1569）の織田信長による普賢寺衆の滅亡（『多聞院日記』・『二条宴乗記』）など、動乱の舞台となる。『言継卿記』・『多聞院日記』には元亀２年（1571）に細川藤孝らが普賢寺へ出陣した記事や、同年に松永久秀が「普賢寺之城」に入城した記事が見られる。また、元亀４年（1573）槇島城の戦いで織田信長に敗れた足利義昭は普賢寺谷を経て河内若江城へ逃れており、天正10年（1582）本能寺の変の際には、堺に滞在中であった徳川家康が本国へ戻るために普賢寺谷を経て木津川を越えていることからも普賢寺谷が交通の要衝であったことが窺える。（山本）

２．既往の調査・報告

1982年に鈴木重治氏は、「同志社校地出土の埋蔵文化財」において、亀坐双鶴秋草文鏡を亀形座双鶴南天文蓬萊鏡（亀形座双鶴文蓬萊鏡）として報告した。当該遺物は、鋳上りが良好であり、1980年当時の小型鏡の出土品としては稀有な例と評価している[3)]。

1993年に新宗谷館跡のⅤ郭の発掘調査が田辺町教育委員会によって行われた[4)]。その際に、土坑や多数のピット、後世の耕作土の層が確認されている。出土遺物としては、12世紀後半の瓦器皿や瓦器椀、16世紀末の土師器皿や土師器小壺、唐津焼の折皿がある。館報第21号では田辺町教育委員会による調査で未報告であった、土師器皿および、15世紀後半の青磁蓮弁文椀、16世紀の白磁皿、染付、18世紀の堺・明石擂鉢などを含む10点の遺物を報告している。そして新宗谷館跡の南端にあたるⅤ郭の遺物の様相は、12世後半、15世紀後半～16世紀、17～18世紀の３時期に分かれると評価している。

2003年の同志社大学歴史資料館による調査ではⅡ郭の北部にトレンチが設けられた。出土遺物としては、土師器皿片や青花、白磁椀などごく少数である[5)]。

2018年には同志社大学歴史資料館による新宗谷館跡出土の土器・陶磁器・石製品について再整理した成果が報告された。その中で、Ⅱ郭東の土塁中より出土した資料群は、瓦質土器を多く含む点で大和国に近い様相を示し、年代は15世紀後半～16世紀後半に収まると報告されている。また、新宗谷館跡の城館としての機能時期は15世紀後半～16世紀後半に当たり、国人衆の活動を文献上で確認できる時期に一致すると評価がなされた。さらに、館の機能時期を遡る可能性がある遺物として、12世紀の三筋壺や14世紀末から15世紀第1四半期の古瀬戸瓶子も報告されている。（山本）

３．出土金属製品（図３～４、写真１～３）

新宗谷館跡出土の金属製品は14点あり、本稿では図化、判別が可能なものを報告する。

（1）和鏡

亀坐双鶴秋草文鏡

現状　完形品。鏡背は大部分が暗緑色の銹で覆われ、一部に緑色銹も認められる。また、部分的に剝げているが、全体的に黒漆を塗っていた痕跡が認められる。下部には薄茶色の銹が部分的に付着している。鏡面は緑色から暗緑色に近い銹で覆われている。

文様・形態　鈕は亀甲文の亀形鈕である。鈕孔状態は楕円形で亀甲文の中央を左右に開く。また、甲羅の緑甲板を鬚状にめぐらす[6)]。亀形鈕の頂部は手馴れにより摩耗し、平滑になっている。また、上部に双鶴を配し、上向きの亀形鈕と三者接嘴する。双鶴は両羽ともに異なる表現はみられない。羽は、鋭い線描で表現されている。右部分には竹、下部には松を配する。右部分の竹は、下部に配する松の中から右上方に伸びるように表され、松は、根から左右に枝が広がる形で表されている。特にこの箇所は腐食が激しく薄茶色の銹が明瞭に確認できる。この文様は亀や鶴、そこに松や竹と理解される草花文様が入り、蓬萊文となる文様構成である。面径5.1㎝、縁高0.3㎝、縁厚0.3㎝、重さ19ｇを測る銅鏡であり、縁が直角する厚縁鏡（直角式厚縁）である。圏式は無圏となる。（濵）

(2) その他の金属製品（２～12）

１は笠鞐である。甲冑の肩にかける高紐を懸け留めるための板状金具である。裏面に向けて弓形に若干反り、紐通しの孔は二孔開いている。長さは3.5㎝、幅９㎜、厚さ５㎜を測り、紐通し孔の径は左側が５㎜、右側が4.5㎜である。全面が緑青で覆われ、銹汁が凝固の際に石材の細片を取り込んでいる。紐通し孔には、紐擦れによる顕著な摩耗は確認できない。また、鍍金や線刻の痕跡も確認できない。

２は八双金物の留め金具である。八双鋲の下に固定される細長い飾金物である八双金物に付随する留め金具であり、菊花文を施した菊座（座金具）内面に炭化した木質が付着する。菊花の花弁と中央の軸は一致せず、鏨によって毛彫で表現されている。中央の軸から外れた位置に、円形孔が表面から穿孔される。孔の径は５㎜である。全面が緑青で覆われ、鍍金や着色の痕跡は確認できない。

３は飾金具である。形状から隅部であると思われるが詳細は不明である。内側に内湾する。全面が緑青で覆われ、炭化した木質が付着する。線刻等の表現は確認できない。

４は銅製の鐶付金具である。座金具は菊花状に加工されており、割足の鐶付金具を挿す。鐶部分は、両端部が互い違いに重なるように銅鐶を折り曲げて固定する。全面が緑青で覆われ、銹汁が凝固の際に製品由来と思われる炭化した木質を取り込んでいる。鍍金や着色の痕跡は確認できない。

５は鞘と柄の間で鍔を両側から嵌めこむことで固定する切羽である。最大厚は１㎜である。全面が緑青で覆われ、銹汁が凝固の際に木質や石材の細片を取り込んでいる。

６は太刀の足金物である。全面が緑青で覆われ、裏面には炭化した木質が横方向に付着する。現状では鍍金や着色、線刻による紋様を施した痕跡は確認できない。類例としては、一乗谷朝倉氏遺跡出土のものがほぼ同形である[7]。一乗谷朝倉氏遺跡出土の足金物は、確認できる全ての個体において、鐶を含む外面全体に黒漆が塗布されており、新宗谷館跡出土の足金物も外面に黒漆が塗布されていた可能性が考えられる。

７～11は銭貨である。７は北宋の元豊通宝（初鋳1078年）である。８は北宋の紹聖元宝（初鋳1094年）である。また、９は北宋の聖宋元宝（初鋳1101年）である。10は、劣化が激しく、銭文を読み取ることはできなかった。11は形が大きくゆがんでいる。銭文の存在も確認することができない。遺物中央に方形孔が確認できることから、銭貨であると判断した。（山本）

４．若干の考察

(1) 和鏡

1980年の発掘で出土した当時は、資料名として亀坐双鶴秋草文鏡と名付けられた。また、鈴木氏によって亀形座双鶴南天文蓬萊鏡と報告がなされている。一方、東京国立博物館所蔵の類似品では、松竹双鶴鏡と名称されている[8]。また、黒川古文化研究所収蔵の秋草双鶴鏡や東京国立博物館所蔵の洲浜双鳥鏡など秋草が描かれている和鏡[9]は、15世紀から16世紀にかけてあまり用いられない意匠であるとされている。

今回の再整理にあたり、前述の東京国立博物館所蔵の和鏡２面を調査し、本資料と比較検討を行っ

てその結果本資料の文様は松竹でありそれがデフォルメ化された状態であると理解した。今後は、松竹双鶴鏡といった名称に変更した方が良いと思われる。

年代については、久保智康氏の示された和鏡の変遷概略によると、14世紀には、亀形鈕の甲羅は花亀甲文が主流となり、双鳥文・双鶴文は鈕の左方に配置するものに加え、鈕上方で向かい合って飛ぶものが一般化するとしている[10]。その中で、双鶴が亀形鈕と嘴を接する鏡が時代が下るにつれて目立つようになるとした。その後、15世紀後半以降漸移的に面径を５～６㎝まで減少させる小型鏡が増加し、文様も蓬莱文が全盛であるとしている。また、類似品が一乗谷朝倉氏遺跡群の朝倉館跡南門（SB56）[11]や、天正元年（1573）を下限とする武家屋敷[12]、武家屋敷北辺の石積施設付近（SF908）[13]からも双鶴や双雀が亀形鈕と嘴を接する意匠の小型鏡が出土している。年代については現段階では室町時代としかいえないが今後研究を進め年代をしぼりこんでいきたい[14]。（濵）

（2）新宗谷館跡における金属製品の位置づけ

新宗谷館跡出土の金属製品は、16世紀後半を下限とする被熱痕をもった土器・陶磁器類と共に土塁中から出土している。刀装具については、天正元年（1573）に廃絶する一乗谷朝倉氏遺跡群において、ほぼ形状を同じくする足金物が複数個体出土していることから、本遺跡出土の足金物は、16世紀後半を下限とするのが妥当であると思われる。製作から廃棄までの時間幅を持たせても、新宗谷館跡出土の土器・陶磁器類の年代観から、15世紀後半～16世紀代の遺物であると評価できるだろう。また、鏡の時期についても、(1)の考察から下限年代については問題ないであろう。

以上の点をふまえると、新宗谷館跡出土の金属製品は、鏡の生産時期については検討の余地があるものの、土器・陶磁器類と同様に、新宗谷館跡が城館として機能していた15世紀後半から16世紀後半の時期幅を持つ、まとまった資料群であると評価することができる。さらに、本資料群は、炭化した木質が内面に付着した八双金物や鐶付金具、足金物の存在から、16世紀後半に新宗谷館で起きた火災に伴う整理によって、被熱した土器・陶磁器類と共に土塁中に廃棄された資料と考えることもできるだろう。（山本）

おわりに

本稿では、新宗谷館跡出土の金属製品の事実報告並びに、金属製品の年代観について若干の考察を行った。前稿での土器・陶磁器・石製品の報告と館の変遷の考察に加え、今回の金属製品の報告において、十分な検討がなされていない南山城地域の城館出土の遺物の様相を明らかにすることができたといえる。

本報告をもって、2017年度の都谷城館群縄張り調査から始まった、新宗谷館跡出土遺物の再整理が一先ず終了した。南山城地域における国人衆の一端を示す新宗谷館跡の報告をきっかけに、南山城国一揆に代表される室町時代の当地域の歴史研究がより深化することを期待し、また解明する動きがより盛んになることを期待する。今後のさらなる調査の進展による資料の蓄積と、網羅的な歴史学研究を望みたい。（山本）

謝辞

本稿を執筆するにあたり、同志社大学歴史資料館浜中邦弘先生、京都大学大学院菊池望氏、一乗谷朝倉氏遺跡資料館赤澤徳明氏、渡邊英明氏、東京国立博物館伊藤信二氏、山本亮氏、國學院大學研究開発推進機構内川隆志氏には大変お世話になった。感謝申し上げたい。

註

1） 岡本健・山本尚人2018「新宗谷館跡出土の土器・陶磁器・石製品の様相について―再整理と若干の考察―」『同志社大学歴史資料館館報』第21号　同志社大学歴史資料館

2）岡本　健・山本尚人・眞田拓弥 2017「京田辺市都谷城館群縄張り調査報告」『同志社考古』14、同志社大学考古学研究会

3）鈴木重治 1982「同志社校地出土の埋蔵文化財」『同志社時報』73

4）鷹野一太郎ほか1994『新宗谷遺跡発掘調査概報』田辺町教育委員会

5）鋤柄俊夫 2004「平成15年度南山城総合学術調査」『同志社大学歴史資料館館報』第７号

6）亀の甲羅の背中側にある背甲の外縁に位置するもの
小家山仁2003『リクガメ大百科』マリン企画

7）福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2007 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告IX第49・50次調査

8）東京国立博物館1969『東京国立博物館図版目録　和鏡篇』

9）水尾比呂志、嶋田玄弥、駒敏郎、吉村元雄、河村正彦、元井能1983『日本の文様　秋草』

10）京都国立博物館1997『京都国立博物館蔵　和鏡』

11）朝倉氏遺跡調査研究所1976『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ―朝倉館跡の調査―』

12）福井県立朝倉氏遺跡資料館 1990『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅲ第４・13次、第20次調査』

13）福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館1993『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅳ第15・25次、第24次調査』

14）久保智康 1999『日本の美術 中世・近世の和鏡』 至文堂

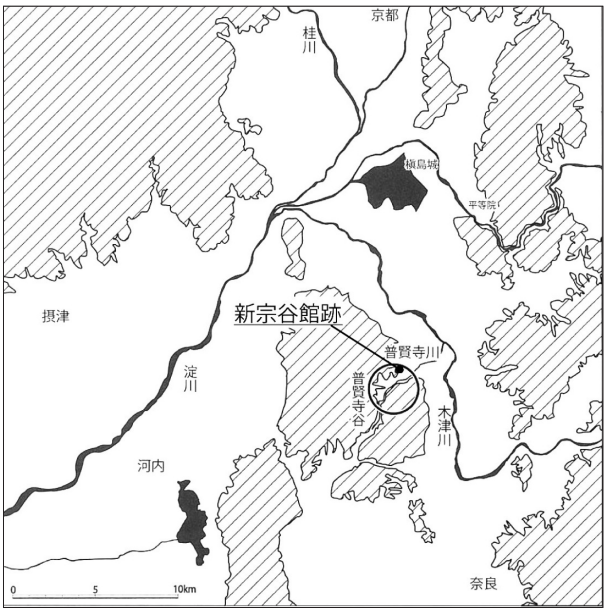

図 1　普賢寺谷と新宗谷館跡の地図
（注 2 文献に加筆、S＝1/50000）

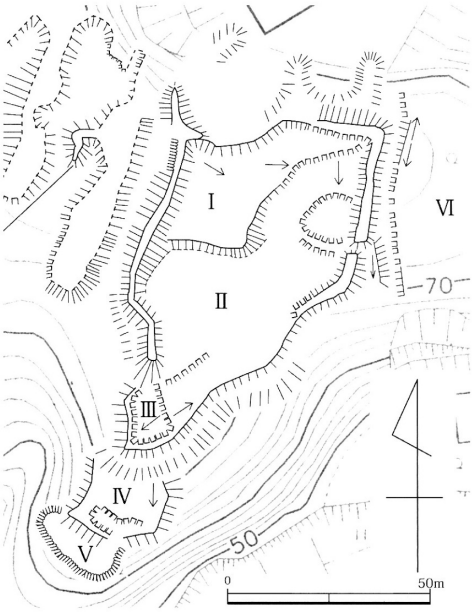

図 2　新宗谷館跡　縄張り図
（注 2 文献より引用、S＝1/1000）

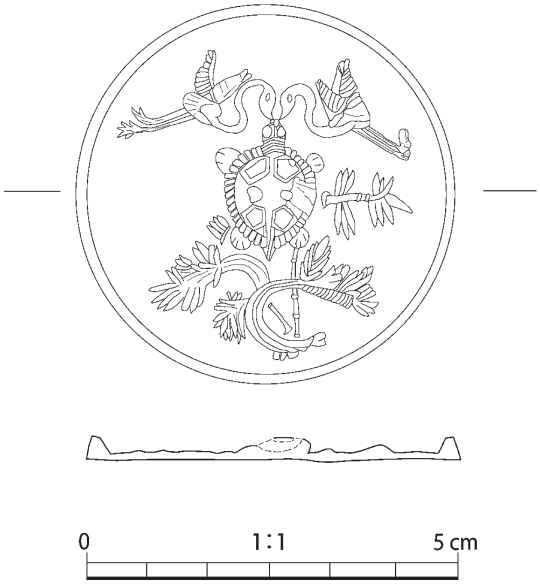

図 3　亀坐双鶴秋草文鏡

写真 1　亀坐双鶴秋草文鏡

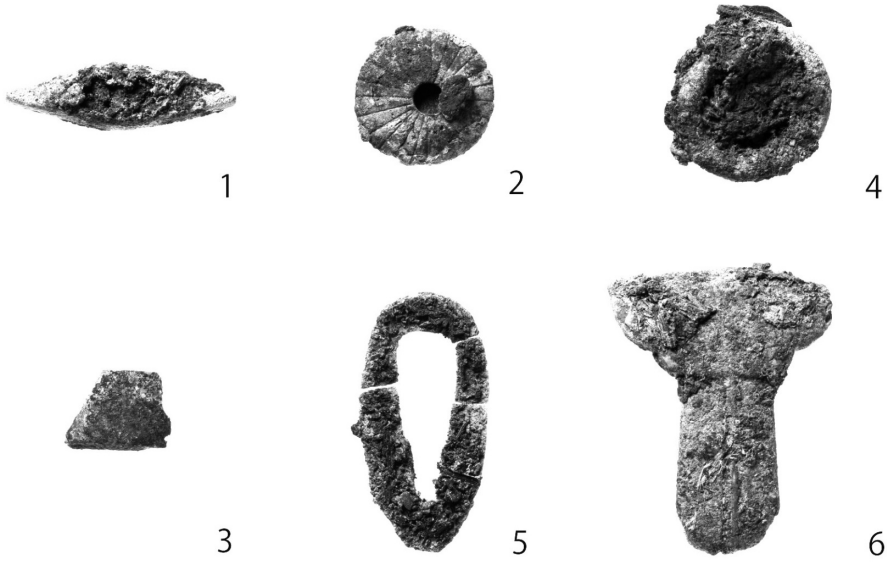

写真 2　刀装具

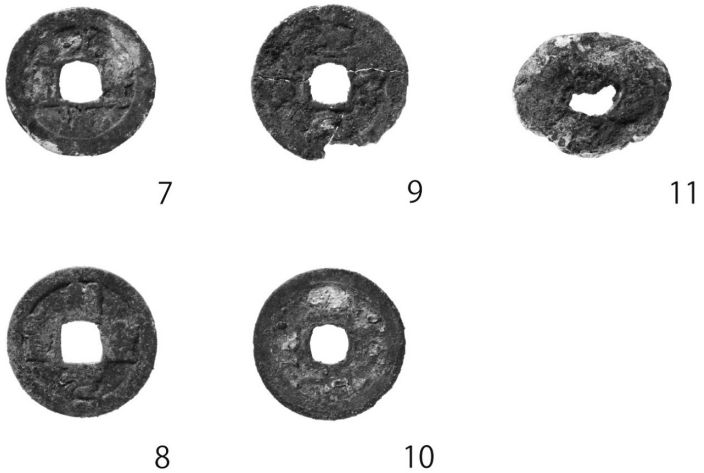

写真 3　銭貨

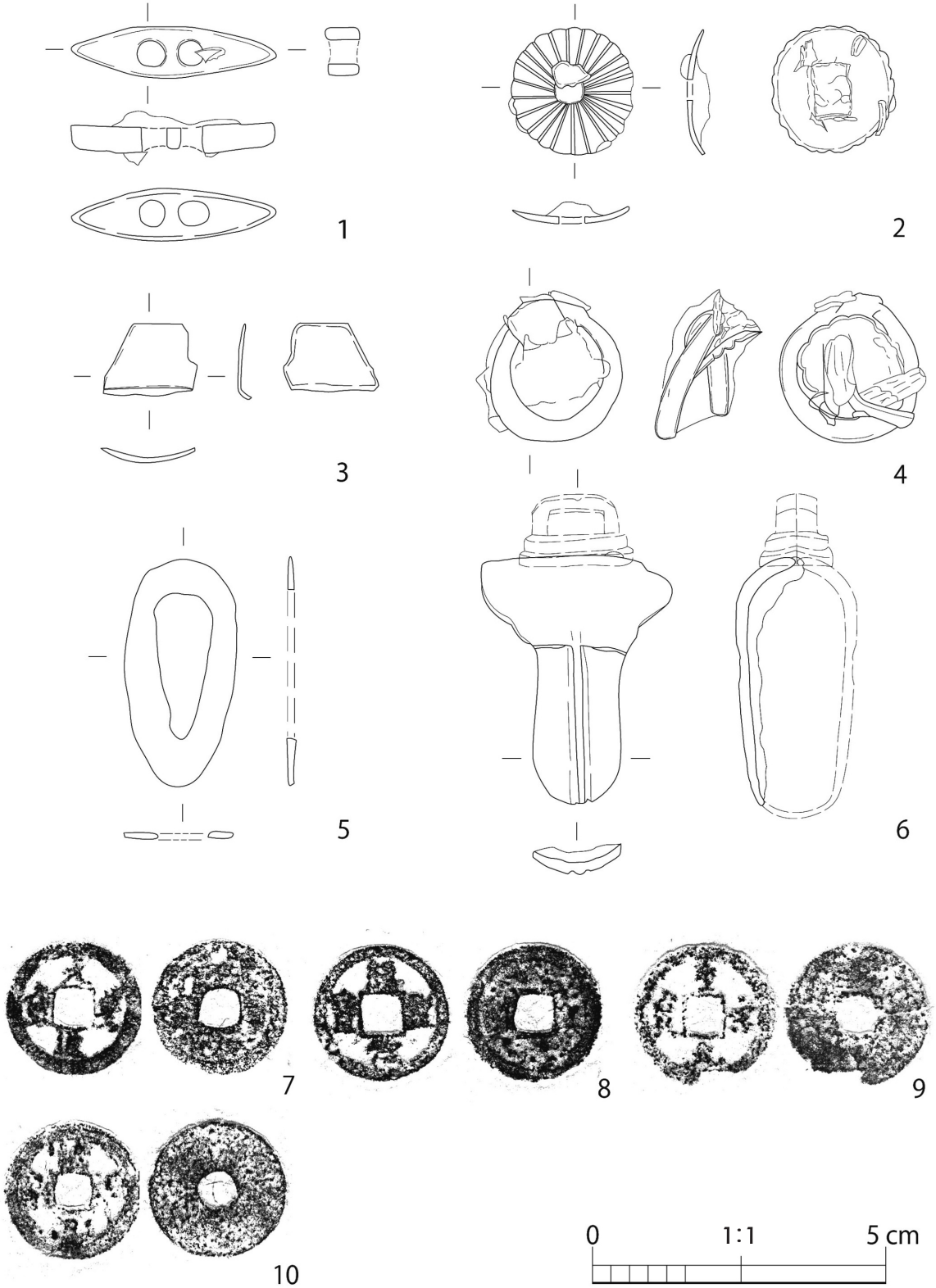

図 4　武具・銭貨